

東京オリンピック芸術展示にみる対外文化戦略

柴田葵*1

東京大学大学院 人文社会系研究科 文化資源学研究専攻 博士課程1年

1. 本研究の梗概

1964年の東京オリンピックは我が国にとって、国際的なスポーツの祭典であるにとどまらず、戦後復興から見事な経済成長を遂げた日本が、自ら一流国家であることを示し、国際社会に堂々と仲間入りをするための千載一遇の機会と捉えられていた。当時の国内では「オリンピック」を大義名分として、インフラの整備を中心とする種々の大型事業が敢行されたことはよく知られている*2。同様に芸術文化の面でも、日本が文化国家であることを示すため、かつてない国家的な規模で文化事業の総動員に力が注がれたのである。

本報告では、東京大会に付随して国家規模で開催された「芸術展示」(美術や写真の展示、伝統芸能や音楽の実演など、古今の日本の文化を幅広く扱った一連の催事)のあり方に焦点を当てることによって、オリンピック期に「日本の文化」が国家によっていかに表象され、対外的な発信を試みられたかについて明らかにする。

2. 「芸術展示」の成立経緯

近代オリンピックの創始者クーベルタンは、古代ギリシャのオリンピックにならい、オリンピックに「芸術競技」を加えることを提案し、それは1912年の第5回ストックホルム大会から導入された。芸術競技は、スポーツを主題として建築・文学・音楽・絵画・写真・彫刻の各分野を競うコンクールであり、1936年ベルリン大会において盛り上がりの頂点を見せつつ、このような形態は1948年のロンドン大会まで継続された。

1952年の第15回ヘルシンキ大会からは「競技」としてではなく、大会に付随して開催される「芸術展示」としての位置づけに変化した。これについて規定したオリンピック憲章第31条は、芸術展示は美術や写真などの展示に加え、音楽や舞台芸術などの上演も含めること、そして競技種目と同等に高度な質が確保されねばならないことを謳っている。

しかし、1912年の芸術競技の始まりから一貫して、1952年に芸術展示へ移行した後も、競技・展示の主題は毎回「スポーツ」に限定されており、この点が芸術展示にある種の停滞をもたらしていたという問題があった。1960年のローマ大会では、芸術展示に新局面をもたらすことを企図して、「歴史と芸術におけるスポーツ展」を開催し、古代ギリシャ・ローマの彫像作品を中心に2000点余の古典芸術が展示された。この試みは一定の成果を上げたが、いまだテーマがスポーツに限られているという限界は残された。

そうした芸術展示のあり方に大きな転換期が訪れたのが、1964年の東京大会に際してであった。1961年6月アテネにおける第58次IOC総会にて、東京大会・芸術展示の主な枠組が決議されたが、その結果「テーマをスポーツに限定せず、日本の古代から近代にいたるまでの一流の芸術を展示する」という基本方針ができあがったのである*3。この決定によって芸術展示の主旨は、芸術作品を通じた「スポーツ」の表象から、「その国(開催国)を代表する芸術の展示」へと変容することになった。このような方針転換は、上述のように

1 elplateroargen@yahoo.co.jp

2 : 越澤明『東京都市計画物語』筑摩書房、2001年

3 : 『東京オリンピック』オリンピック東京組織委員会、1960-64年

芸術展示が長らく抱えていた問題を解決するためのものであると同時に、日本側が IOC へ強く要請したものであり*4、日本芸術の粋を集めた展示を国際的な舞台で開催しようとする、日本国家のはたらきかけが背景にあった。また、当時 IOC 会長を務めるアベリー・ブランデーは東洋美術のコレクターとして世界的に知られており、日本芸術にも理解と造詣が深く、このような芸術展示のあり方を積極的に推進した主体の一人であった。

3. 「日本の芸術」はどのように展示されたか

オリンピック東京大会組織委員会 (JOC) は、1961 年「芸術展示特別委員会」を設置し、細川護立 (= 文化財保護委員) を委員長とする 26 人の委員を、絵画・彫刻・音楽・舞踊・建築等、芸術の各分野の専門家から抜擢した。特別委員会は、あらゆる分野において「我が国一流の芸術」を示すという趣旨で、下記のような 2 部門・計 10 種目から構成される芸術展示のプログラムの大枠を、1963 年 9 月発表した。

A 美術部門						
古美術	近代美術	写真	スポーツ郵便切手			
B 芸能部門						
歌舞伎	人形浄瑠璃	雅楽	能楽	古典舞踊・邦楽	民俗芸能	

この芸術展示の運営方法としては、JOC・特別委員会がプログラム全体を統括し、文部省・外務省などの省庁や東京都が行政として関与、各個別の企画(「種目」)については、美術館・劇場・芸術諸団体との連携をはかりつつ企画・運営されるという体制であった。具体的には、上記の各 10 種目はオリンピック期間中、東京都内の美術館・デパート・ホールなどで展示・上演されることになるが、委員会と当該施設・団体等の協議の下に企画が考案され実行される運びとなる。

JOC が主催するプログラムは上記の 10 種目に限られるが、これ以外にも「協賛芸術展示」として、数多くの企画が参入した。委員会の主催するジャンルは日本古来の芸術に偏る傾向があり、現代美術・演劇・クラシック音楽・オペラ・バレエなどの分野をカバーする目的も含め、組織委員会は 1964 年 6 月、上記のジャンルを問わず優れた芸術展示については、文部省・東京都・組織委の三者の判断により「協賛芸術展示」とすることを認めた*5。さらに、芸術展示や協賛企画とは直接の関連はないが、独自に「オリンピック記念」と冠して企画を打ち立てる美術館・劇場・芸術団体が、首都圏や関西で次々と現れることになった。

4. 芸術展示、および協賛企画の詳細

A 美術部門

古美術 東京国立博物館、10月1日～11月10日(入場者40万6739人)

東京国立博物館の本館・表慶館を会場に開催された古美術展は、美術部門の中で最も力を入れて行われた企画であり、「この大展示は、まったく国をあげての展観であり、その展

4 : JOC 事務局長の田畑政治が、IOC 会長のアベリー・ブランデーに提出した書簡を参照(オリンピック東京組織委員会、前掲)。

5 : 「優秀な芸術展示には協賛：五輪組織委」『朝日新聞』1964年6月7日夕刊

示には国内で最高のものが予定され、また出品が期待された」*6とされている。趣旨としては、海外からの来訪者を最も重要な観客層と位置づけ、縄文期から江戸末期に至る日本美術史の歩みを、代表的な名品を通じて示そうとするものである。絵画・彫刻・工芸・建築・書道の各分野にわたって、国宝 154 点・重要文化財 254 点・重要美術品 40 点を含む、総点数 877 点が出品された(建築については、法隆寺五重塔・唐招提寺金堂などの模型を展示)。この展示には約 4000 万円(通常の特別展の約 8 倍)の予算が、会場の設備改装には 1 億 5000 万円もの費用が投じられ、それまでの日本の博物館では類をみない一大事業となった。

近代美術 国立近代美術館(京橋) 10月1日~11月8日(入場者3万7725人)

「近代日本の名作展」として、国立近代美術館所蔵の作品を中心に、明治以後から現代に至るまでの絵画(日本画・油絵・版画)・彫刻・工芸の歩みを紹介する展覧会である。146人の作家による191点が出品された。

日本画では、富岡鉄斎・川井玉堂・横山大観・小林古径・福田平八郎・杉山寧・加山又造ら、油絵では浅井忠・黒田清輝・青木繁・岸田劉生・佐伯祐三・藤島武二・安井曾太郎、梅原龍三郎・岡田謙三・山口長男、齋藤義重、菅井汲ら、版画では棟方志功・浜口陽三、彫刻では、高村光雲・佐藤朝山・荻原守衛・高村光太郎・木内克・植木茂・向井良吉らの作品がほぼ年代順に展示され、オーソドックスな日本美術近代美術史の名品展となった。

写真 銀座・松屋、10月9日~21日、(入場者7万4752人)

写真展「日本・カラー・1964」が日本写真協会の協力により開催された。金丸重嶺・伊奈信男・滝口修造の3選考委員によって選ばれた約50名の作家(木村伊兵衛、土門拳、浜谷浩、三木淳、石元泰博、細江英公、奈良原一高ら)が、1人3点程度オール・カラー作品を出品、165点が展示される。「日本固有のものを表現する」ということが展示の主旨であり、全て国産の感光材料を使うことが条件づけられた。

スポーツ郵便切手 通信総合博物館、10月1日~21日(入場者2万3335人)

通信総合博物館を会場とし、同館所蔵品の中から1871(明治10)年発行のわが国最初の郵便切手をはじめ、日本のスポーツ切手シート79種、日本の主な切手約1000種、その他原画や琉球政府の切手等約150種を展示した。一般的には「芸術」の範疇とは必ずしも認識されていない「郵便切手」が、芸術展示のプログラムに組み込まれた背景・経緯については、さらに調査検討の余地がある。

B 芸能部門

歌舞伎 歌舞伎座、10月2日~27日

昼の部では「寺子屋」「京鹿子娘道成寺」「野崎村」、夜の部では歌舞伎十八番の内「鳴神」「鏡獅子」「助六由縁江戸」を歌舞伎座にて上演した。松竹株式会社の協力による。

人形浄瑠璃 芸術座、10月3日~12日

第1部では「万歳・海人」「熊谷陣屋」「朝顔話」「道行恋の小田巻」、第2部では「尼ヶ

6 : 蔵田蔵「オリンピック東京大会日本古美術展について」『東京国立博物館研究誌』通号162、東京国立博物館、1964年9月

崎」「野崎村」、第3部では「熊谷陣屋」文楽珠玉三題「三番叟」「お七」「夕霧」を上演した。特に「文楽珠玉三題」は外国人に紹介するための分かりやすいプログラムとして設定されている。文楽協会の協力による。

雅楽 国立教育会館虎の門ホール、10月21日～23日

管弦：「盤渉調音取」「青海波」「越天楽」 人長舞：「其駒」 舞楽「還城楽」「貴徳急」「太平楽急」宮内庁雅楽部の協力による。

能楽 水道橋能楽堂、10月5日～9日

観世・宝生・和泉・金春・金剛・大蔵の能楽五流がそろって出演し、「翁」「石橋」「邯鄲」「船弁慶」「松風」「道成寺」など、10公演で22演目を競演した。能楽協会の協力による。

古典舞踊・邦楽 新橋演舞場、10月16日～20日

長唄・常磐津など、代表的な古典舞踊・邦楽が、10公演で69演目上演された。日本舞踊協会の協力による。

民俗芸能 東京文化会館、10月17日～18日

北海道から沖縄まで日本全国各地の民謡・舞踊の中から、20演目が紹介された。日本放送協会（NHK）の協力による。

5. 結論と今後の課題

東京オリンピック芸術展示では、日本の古典的・伝統的な芸術の展示・上演に大きな力が注がれ、日本を訪れた外国人層を主たる対象者として、日本文化の粋を紹介する試みがなされた。個々の企画の単位としては、いずれも従来の我が国における美術展や舞台公演の規模を大幅に上回るものであったが、最も注目すべきはこれに協賛企画や自主的なオリンピック関連企画を含めた、多分野にわたる数多くの文化事業が、「オリンピック」の名の下に一大集結をみたという事実である。このような国家をあげての動員による文化事業の一大組織化は、戦後の我が国においては類を見ない展開となった。今後は当時の文化外交・国際文化交流の状況と背景を考察に加えた上で、オリンピック期の国家による日本文化の表象と発信についてさらに検討する必要がある。

【主要参考文献】

- ・ Noriko Aso, *Sumptuous Re-past, Positions*, Duke University Press, December 2002
- ・ 国立近代美術館京都分館『日本・カラー1964：特陳・東京オリンピック報道写真：現代写真代表作展』平凡社、1964年
- ・ 平野健一郎「戦後日本外交における文化」渡辺昭夫編『戦後日本の対外政策』有斐閣、1985年
- ・ オリンピック東京大会組織委員会『東京オリンピック』オリンピック東京大会組織委員会、1960 - 64年
- ・ オリンピック東京大会組織委員会・国立近代美術館『近代日本の名作：オリンピック東京大会芸術展示』オリンピック東京大会組織委員会、1964年
- ・ 戦後日本国際文化交流研究会著・平野健一郎監修『戦後日本の国際文化交流』勁草書房、2005年
- ・ 『日本古美術展図録』東京国立博物館、1964年